

## 記憶を持たない滝谷父子

### －村上春樹短編小説「トニー滝谷」論－

關冰冰 / Guan, Bing-Bing

浙江外國語學院 副教授

Zhejiang International Studies University, Associate Professor

楊炳菁 / Yang, Bing-Jing

北京外國語大學 副教授

Beijing Foreign Studies University, Associate Professor

#### 【摘要】

《托尼瀑谷》描寫了從日本的戰亂時代到泡沫經濟前後，瀑谷父子的人生。由於小說以歷史為縱軸充當背景，因此小說中有關歷史的描寫顯得意義重大。然而「歷史」所指代的具體階段，會隨著小說的敘述者、瀑谷省三郎以及托尼瀑谷的不同而發生變化。同時，小說中的歷史都是小說人物的親身經歷。對於他們來講，小說中的歷史不僅存在著從現實到歷史的轉變，而且存在著從過去到現在的連續性。先行研究並未關注到這種轉變和連續性，因此對於歷史與瀑谷父子的相互關係以及歷史背景中瀑谷父子之間的相互關係沒有展開相應論述。如果從現實到歷史的轉變以及從過去到現在的連續性來考瀑谷父子的人生便可以發現，《托尼瀑谷》是一篇關於記憶的小說。

**【關鍵字】**

村上春樹，《托尼瀑谷》，歷史，記憶，實用主義

**【Abstract】**

*Tony Takitani* describes the lives of Takitani and his son from the war era to the bubble economy in Japan. As the story takes history as the vertical axis of the background, the description of history is of great significance. However, the specific stages referred to by “history” vary with the narrator of the story, Shozaburo Takitani, and Tony Takitani. At the same time, the history in the story is the personal experience of the characters. For them, the history in the story not only has a transition from reality to history, but also has a continuity from the past to the present. The previous research failed to pay attention to this transition and continuity, so there is a blank in the discussion on the relationship between history, Takitani, and his son, and on the the relationship between Takitani and his son in the historical background. If we examine the lives of Takitani and his son from the perspective of the transition from reality to history and the continuity from the past to the present, we can find that *Tony Takitani* is a novel about memory.

**【Key words】**

Haruki Murakami, *Tony Takitani*, history, memory, pragmatism

## 1. 問題の所在

「トニー滝谷」は 1990 年 6 月号の『文藝春秋』に発表された村上春樹の短編小説で、三回の改稿が行われた作品でもある<sup>1</sup>。登場人物の名前で命名されたこの短編は、歴史を背景にトニー滝谷父子の孤独な人生を描いたが、ジェイ・ルービン氏と藤井省三氏は自分の著書でそれぞれこの短編と『ねじまき鳥クロニクル』との関連を論じていた<sup>2</sup>。全三巻の大作『ねじまき鳥クロニクル』は村上春樹の代表作と見られる<sup>3</sup>ため、もしそれと関連があれば、「トニー滝谷」に対する分析は相当重要だと言える。なぜなら、これは単なる「トニー滝谷」の解説だけではなく、『ねじまき鳥クロニクル』を理解するのに役にも立つものだからである。だが、現段階では、「トニー滝谷」をめぐる研究は決して多いとは言えない。概観すれば、「トニー滝谷」論は概ね二種類に分けられる。一つ目はあるポイントに焦点を絞って論ずるもので、二つ目は小説全体を対象に解説するものである。

あるポイントに焦点を絞って論ずるものの例として、森晴彦氏の一連の論文『「トニー滝谷」の本文改訂』<sup>4</sup>、徐忍宇氏の「名前からの逃避：「固有名」のアレゴリー読

<sup>1</sup> 「トニー滝谷」は『文藝春秋』、『村上春樹全作品 1979～1989』第 8 巻および短編集『レキシントンの幽霊』に掲載、収録されたとき、それぞれ違うバージョンで掲載、収録された。この点について、『村上春樹全作品 1979～1989』第 8 巻の「自作を語る」PXI に詳しい。なお、本稿は『村上春樹全作品 1979～1989』に収録されたバージョンをテキストとしており、バージョンの比較などに触れない。

<sup>2</sup> ジェイ・ルービン氏の『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（畔柳和代訳、新潮社、2006 年、p219）と藤井省三氏の『村上春樹のなかの中国』（朝日新聞社、2007、p49-60）を参照。

<sup>3</sup> 『ねじまき鳥クロニクル』について、宇佐美毅氏は『村上春樹と一九九〇年代』の「あとがき」において、次のように評した。「『ねじまき鳥クロニクル』に関しては研究も多く、村上春樹の代表作として評価する意見も多い。」（宇佐美毅、千田洋幸編『村上春樹と一九九〇年代』おうふう、2012 年、p323）

<sup>4</sup> 森晴彦氏の一連の論文は大正大学表現学部表現文化学科主宰の『表現学』に発表されており、CINII で検索できるものは以下の通りである。1、『トニー滝谷』の本文改訂(3)全作品(8)本文の性格(続)・五二箇所七九個の本文異同一覧（『表現学』2017、3）2、『トニー滝谷』の本文改訂(5)ショート・ロング両ヴァージョンの上海関係についての描写（『表現学』2018、2）3、『トニー滝谷』の本文改訂(6)ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(1)（『表現学』2019、3）4、『トニー滝谷』の本文改訂(7)ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(2)（『表現学』2020、3）5、『トニー滝谷』の本文改訂(8)ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(3)（『表現学』2021、2）。なお、解釈学会主宰の『解釈』の 61 号に掲載された森晴彦氏の論文「全作品(8)所収『トニー滝谷』本文の性格：定本との差異とその独自性が意味するもの」とも本文改訂研究の範囲に属するもの

む「トニー滝谷」、山根由美恵氏の「絶対的孤独の物語——村上春樹「トニー滝谷」「氷男」におけるジェンダー意識」および山崎真紀子氏の「村上春樹が描く上海——『トニー滝谷』における父子の傷」などが挙げられる。『表現学』に発表されたことからわかるように、森晴彦氏の一連の論文は小説の各バージョンを比較するものである。そして、徐忍宇氏は「トニー滝谷」という名前からアプローチして、小説のことを「名前のせいで孤立してしまった人間が、その孤立から逃れようと試みるが、結局挫折してしまうという話」（徐忍宇 2007：56）だと論じている。勿論、これは息子のトニー滝谷にもっぱら目を向けており、父親の滝谷省三郎を論外にしたと言っていいだろう。また、山根由美恵氏は「トニー滝谷」を「喪失からくる孤独の物語」（山根由美恵 2010：19）だと読んでいるが、論文のタイトルおよびその結論から見てみれば、氏は人間そのものに焦点を絞って論じており、小説における大量な歴史の描写を捨象したと言えよう。山崎真紀子氏は上海および伝達に注目し、「言葉に変換せず、演奏と模写で傷を封じ込めてきた父子が描かれている」（山崎真紀子 2019：182）と結論づけた。ただ、山崎氏は滝谷父子の関係をそのまま村上春樹の父子関係と見ているようである。確かに村上春樹の父親は中国に派兵された経験があり、村上春樹もそれを自分の「心の傷」（イアン・ブルマ 1998：93）だと継承しているようである。しかし、たとえ村上春樹の父親の経験をもって滝谷省三郎のことは解釈できても、中華料理を食べない村上春樹で息子のトニーは解釈できないだろう。要するに、滝谷父子の関係をそのまま村上春樹の父子関係に当てはめるのは短絡的であり、また小説における戦後に関する描写も見逃してしまっていると言えよう。

以上の研究は、小説の解読に多大な示唆を与えたが、一つのポイントに集中したため、他のポイントを見逃している可能性があることは否めない。一方、小説全体を対象に解読するものは視野の広さを示したが、それなりの問題が存在することも看過できない。例えばジェイ・ルービン氏は歴史の細部の描写に注目し、次のように論じている。

---

と思われる。

二十ページにうまく盛り込んだ歴史の広がり 요약するのには困難だ。それは大日本帝国の拡張主義時代から、現在の東京の富裕層が暮らす郊外や青山界隈のブティックにおける虚ろで豊かな時代にいたる歴史である。（ジェイ・ルービン 2006：219）

ジェイ・ルービン氏は「歴史」（ジェイ・ルービン 2006：219）に言及したが、論の展開においては歴史と人間の相関関係に触れていなかった。つまり、ジェイ・ルービン氏から見れば、小説に描かれた歴史は背景に過ぎず、登場人物とさほど関係のないものと言っているだろう。それに対して、藤井省三氏は歴史と人間の相関関係に目を向け、「トニー滝谷」の主題を次のように要約した。

戦争体験の忘却という罪を犯した父を持つ子供が、再び社会に対する無関心という罪を犯して孤独という罰を受ける、という父子二代の因果が「トニー滝谷」の物語ではなかったろうか。（藤井省三 2007：59）

藤井氏の結論は明らかにトニーの人生に絞って出されたものである。つまり、トニーが現実の中で「孤独という罰」（藤井省三 2007：59）を受けた理由として、社会に対する無関心が挙げられ、その無関心は、「戦争体験の忘却という罪を犯した父」（藤井省三 2007：59）から由来したものである。ここにおける「戦争体験」（藤井省三 2007：59）は勿論歴史のことを指しており、「戦争体験の忘却」（藤井省三 2007：59）は歴史に対する意識がないということになる。したがって、藤井氏の結論は次のように言い換えられる。歴史に対する意識がなければ、社会に対しても関心を持つことはできない。したがって、そのような人間は現実において孤独の罰を受けることになる。

藤井氏の結論はそれなりの合理性がある。なぜなら、父親の省三郎に対して小説には「歴史に対する意志とか省察とかいったようなものをまったくといっていいほど持

ち合わせない人間」(村上春樹 1991: 227-228)<sup>5</sup>という評価もあるし、息子のトニーも確かに孤独な生活を送っているからである。本稿では、「歴史に対する意志とか省察...人間」(227-228)を歴史に対する意識を持たない人間と簡略したが、ちなみに指摘しておきたいのは、孤独な生活を送る者は息子のトニーに限らず、父親の省三郎もそうだったのである。ただ、ここで二つの疑問が自然に湧いてくると思われる。一つ目は、省三郎はなぜ歴史に対して意志とか省察などを持っていないのか。また、トニーはなぜ歴史に対する意志と省察などが無い父親がいるために、孤独な人生を送るしかできないのだろうか。この二つの疑問の底に潜んでいる繋がり、つまり、歴史に対する意志と省察がないことと孤独な人生を送ることとの間にどんな因果関係があるのだろうか。

小説を読めばわかるように、省三郎の「戦争体験の忘却」(藤井省三 2007: 59)は社会(戦争)に対する無関心からきたもので、また、前述のように孤独に陥ったのは、息子のトニーに限らず、父親の省三郎も同様である。小説は省三郎からトニーへという大きな枠組みをもって語っているが、大きな枠組みのもとにあった省三郎の人生とトニーの人生のような二つの小さな枠組みも看過できない。したがって、以上の二つの疑問を解決しようとするならば、歴史に対する意識の視角から、省三郎の人生の性質とトニーの人生の性質、また二人の人生のつながりを明らかにする必要がある。これに基づいて、小説の主題が浮き彫りになると思われる。

## 2. 歴史と滝谷父子

前述のように、ジェイ・ルービン氏は小説に描かれた背景を「大日本帝国の拡張主義時代から、現在の東京の富裕層が暮らす郊外や青山界隈のブティックにおける虚ろで豊かな時代にいたる歴史」(ジェイ・ルービン 2006: 219)とまとめた。実際には、小説に描かれたのは四つの時代で、具体的に言えば、父親の省三郎が主に

<sup>5</sup> 本稿は『村上春樹全作品 1979～1989』第8巻(講談社、1991年)に収録されたバージョンをテキストとして使い、以下本文の引用はページ数だけを記す。

経験した「戦乱激動の時代」(227)と戦後の占領時代、息子のトニーが主に経験した学生運動の時代とバブル期前後の時代である。四つの時代は「歴史」(ジェイ・ルービン 2006:219)と呼ばれているが、その時代を経験した登場人物にとってはむしろ現実と言ったほうがより適切であろう。本節では、滝谷父子がいかにかその時代を過ごしてきたかを考察し、歴史と滝谷父子の相関関係を分析する。

## 2. 1 歴史と省三郎

省三郎がまず経験したのは「戦乱激動の時代」(227)である。「戦乱激動の時代」(227)は当然省三郎に影響を与えたが、「戦争は彼とはまったく関係のないところで行われていた」(227)ようだ。省三郎の人生は一言でいえば歴史性がないものである。というのは、登場から死ぬまで、いかなる歴史の時期においても、彼の人生は音楽と女で満たされ、音楽と女さえあれば、周りの世界はどんなことが起こっても自分とは無関係のようである。ただ、興味深いことに、このような省三郎は自分の享樂的生活を維持するために、常に「役に立つ」(228)友人を作る。

省三郎が親しく付き合ったのは「陸軍の高官や、中国人の金持ち連中や、その他正体不明の方法で戦争から莫大な利益を吸い上げている羽振のいい連中」(228)だった。勿論、これは、「戦乱激動の時代」(227)であるがゆえに、その類の友人を作ったわけではなく、「役に立つ」(228)かどうかという基準があるからこそもたらした結果である。「役に立つ」(228)という交友基準は明らかに省三郎の実用主義を反映している。というのは、実用主義は「実際に役立つことばかりを重視する傾向」(日本国語大辞典第二版編集委員会 2001:869)を意味しているからである。ここで注意したいのは、「役に立つ」(228)友人たちの力はまさにその「戦乱激動の時代」(227)という歴史によってもたらされたものだったが、省三郎はそこまで意識していなかったようである。そして、そのような意識がないためか、彼は敗戦直後「様々な胡散臭い連中との交遊が祟って中国軍に目をつけられ、長いあいだ刑務所に放り込まれることになった」(228)。いつか処刑されるかもしれぬ当時の

状況は、省三郎にとって、まさに「生と死とのあいだには、文字どおり髪の毛一本くらの隙間しかなかった」（229）。ところが刑務所にいる省三郎は、依然として、自分の危機は歴史に由来したものとは意識せず、これまで過ごしてきた享樂的な人生に満足する。そして、何百万人もの日本人が戦争で死んだという理由で、死に対しては特に「恐ろしくはなかった」（229）ようである。

人生の最大の危機にあった省三郎は結局その危機を乗り越え、偶然のように帰国できたが、「滝谷省三郎はその刑務所から生きて日本に帰国することのできたただ二人の日本人のうちの一人だった。生き残ったもうひとりの高級将校はほとんど頭がおかしくなっていた」（229）というところに注意したい。省三郎が生きたまま日本に帰国する偶然を表現するだけなら、もう一人の高級将校のことに言及する必要はなく、その人は頭がおかしくなったことまで付け加える必要もない。この興味深い表現を理解するには、おそらく同じ段落にあった「何百万という数の日本人が死んだんだ」（229）という表現と、高級将校の異常な生および省三郎の正常な生と結びつけねばならないと思われる。つまり、これは省三郎の偶然を強調するものではなく、歴史に対する意識がなく、「役に立つ」(228)から交友する省三郎のことであるが故に、危うい局面を乗り越えられ、正気を保ったまま生き残ったことへの暗示と理解すべきであろう。逆に、自分の人生を歴史と結びつけ、つまり歴史に対する意識を持っている人たちであるなら、死ぬか、生き残っても「頭がおかしくな」（229）る、と小説の描写から推測できる。

やがて日本は戦後の占領期に入る。この時期においては、省三郎は上海時代の交友経験およびそれによってもたらされた危機を教訓にせず、再び「役に立つ」（228）基準で米軍の少佐と仲良くなり、豊かな享樂生活を再度送るようになった。ただ、「戦乱激動の時代」（227）と異なって、歴史がもたらした影響は彼自身にとどまらず、息子のトニーにも影を落とした。

トニーの誕生は省三郎が結婚した翌年のことだったが、生まれた三日後に母親に



死なれたため、仲良くしていた米軍少佐に「自分のファースト・ネームであるトニーという名前を」（231）付けてもらった。トニーの命名は、いかにも省三郎と関係がなさそうに見えたが、実際には省三郎と深く関わっていると言えよう。トニーという名前について、小説では次のように省三郎の反応を描いた。

滝谷省三郎は家に帰ると紙に「トニー滝谷」という名前を書いて壁にはり、それを何日か眺めていた。滝谷トニー、悪くないじゃないか、と滝谷省三郎は思った。これからはしばらくアメリカの時代が続くだろうし、息子にアメリカ風の名前をつけておくのも何かと便利であるかもしれない。（232）

息子の名前は確かに米軍少佐によって付けられたが、父親の省三郎が熟慮したうえで同意したものに違いない。それだけではない。「これからはしばらくアメリカの時代が続くだろうし、息子にアメリカ風の名前をつけておくのも何かと便利であるかもしれない」（232）という省三郎が同意した理由に特に注意したい。これは省三郎の実用主義を再度完璧に反映したと言えよう。

## 2. 2 歴史とトニー

父親の省三郎と違い、＜トニー＞という歴史の刻みを帯びた名前がすでに幼いトニーに影響を与えた。トニーは「学校で混血とからかわれたし」（232）、名乗ると相手が「妙な顔をするか、あるいはちょっと嫌な顔をした」（232）。したがって、トニーは「友達らしい友達もできなかった」（232）し、「一人でいることは、彼にとってはごく自然なことであり、敢えて言うならば、人生のある種的前提でさえあった」（232）。「ごく自然なこと」（232）と「人生のある種的前提」（232）などはトニーに対する語り手の評価で、幼いトニーにはそのように思えるかどうか当然不明である。ただ、この評価は三人称で下したため、ある程度客観性を保証したと言えよう。また、このような評価からも、トニーは歴史の視角から自分の名前を見ていないということがわかる。なぜなら、彼は自分の孤独を人生の前提とするだけで、名前に対する歴史の影響を

配慮しなかったからである。つまり、もし彼が歴史の視角から自分の名前を考えられれば、自ら日本人らしい名前にチェンジし、その影響から脱出できるだろう。

いずれにしてもトニーはその名を持ちながら成長し、学生運動の時代に青春を迎えた。この時期は「青年たちが権威や体制に対して切実に暴力的に反抗していた時代」(233) だったが、「悩み、模索し、苦しんでいる」(233) 周りの青年たちと異なっていて、トニーは「何も考えることなく黙々と精密でメカニックな絵を描き続けた」(233)。「悩み、模索し、苦しんでいる」(233) 周りの青年たちはいうまでもなく自分の人生を歴史に結びつけている人々である。そのような人々はどちらかという当時の大半を占めている存在で、若者の主流と言えよう。したがって、「その極めて実地的な絵を評価するような人間は彼の周囲にほとんど存在しなかった。美術大学の教師たちは彼の描いた絵を見ると苦笑した。クラスメイトたちはその無思想性を批判した」(233)。

トニーの絵はトニーの価値観を反映するものだけでなく、彼自身の反映とみなしても構わないと思われる。したがって、トニーにとっては、「「思想性のある」絵のどこがいいのかさっぱり理解でき」(233) ず、「ものの細部を克明に描く」(233) 絵こそまともなものだと認識しているだろう。

やがて学生運動の時代が終わり、日本はバブル期前後の時代になった。思想性のある先生やクラスメイトたちはその後どうなったかは描かれていなかったが、大学卒業後のトニーは「極めて実地的な技術と、現実的な有用性のおかげで」、「最初から仕事には不自由しなかった」(233)。また、彼は「暇さえあれば仕事をしていたし、これといって金のかかる趣味も持たなかったので、三十五歳になるころにはちょっとした資産家に」なり(234)、裕福な生活を送ることができた。

滝谷父子と歴史との相関関係を考察してみれば分かるように、いかなる時代を生きていても、社会の出来事は滝谷父子と無関係のように起きていて、二人ともそ

の社会の出来事に対しても無関心な状態にある。このような無関心な状態は当然歴史に対する意識を持たないことからきたわけであるが、一方、実際の生活においては、省三郎は「役に立つ」(228) 基準で交友し、トニーは「現実的な有用性」(233) に長けている。つまり、滝谷父子は実用主義の態度で人生を送っているわけである。歴史に対する意識をもたない滝谷父子は実際に生活するとき、ともに実用主義の態度で出来事に対応する。この歴史に対する意識を持たないことと、彼らの実用主義の態度との間に果たして関係があるのだろうか。

### 3. 実用主義と滝谷父子

役に立つかどうか、有用性があるかどうか、という実用主義の態度で人生を送るなら、悪い結果になりかねないと思われがちだが、滝谷父子の場合はむしろ多くのメリットを得たと言えよう。というのは、父親の省三郎にしろ、息子のトニーにしろ、実用主義のおかげで裕福な生活を過ごせたからである。だが、役に立つかどうかあるいは有用性があるかどうかという態度で人生を送る場合、必ずと言っていいほど精神など内的世界に属するものを除外し、それを問題視していない嫌いがある。したがって、たとえ豊かな生活を送ることができても、滝谷父子は解決できない内的世界の問題に遭遇することもあるに違いない。

#### 3. 1 省三郎の遭遇した問題

まず省三郎の場合を見てみよう。実用主義のおかげで、省三郎は人生の最大の危機――死を乗り越えたが、歴史の視角から死に対する思考ができないまま日本に戻った。そして、そのような思考ができないためか、亡くなった両親と行方不明の兄のことを知った時の省三郎は「それほど悲しいとも切ないとも感じなかったし、とくにショックも受けなかった」(229)。勿論、省三郎には「欠落感のようなもの」(229) が湧いてきたが、それは単に感覚に過ぎず、両親の死や兄の行方不明は自分にどんなものをもたらしたかを理性的に分析し、深く理解できなかった。省三郎のこの状態は妻の死後さらに顕著になっている。

その死が自分にもたらすものを推測し、判断することができなかった。彼にできるのは、それを既成の事実としてそのまま呑み込んでしまうだけだった。その結果、何か平板な、円盤のようなものがすっぽりと胸の中に入っているような気がした。しかしそれがどういう種類の物体で、どうしてそこにあるのか、彼にはさっぱり理解できなかった。ただその物体はずっとそこにあって、彼がそれ以上何かを深く考えることを阻止していた。(231)

妻の死が自分に何をもたらしたか分からないのはいかにも省三郎らしいが、上記引用部をさらに詳しく考察すれば、興味深いところが見つかる。まず、最初の二句は語り手が省三郎の状態を描写するものであるが、推測、判断ができなかったとか、既成の事実として呑み込むなどの表現から内的世界における省三郎の空洞化、およびその空洞化がもたらした結果が読み取れる。次の「何か平板な…」(231)という文になると、省三郎が主語となり、当時の感覚を表した。内的世界が空洞化していたため、省三郎は理性的な判断や、自己認識などはできず、ただ感覚だけを覚えたようだった。さらに、その感覚を省三郎は認知できず、当然「理解できなかった」(231)が、これは次の「しかし…」(231)という一句で表現されている。ただし、この文は再び語り手の視角となっていて、省三郎の感覚を感覚だけに留めたと言える。そして、最後の一句は同様に語り手が主役であり、省三郎が空洞化に対する思考の可能性を封じたことを表現したと言える。要するに、何か出来事にあった場合、省三郎は理性的に考えられず、ただ感覚だけを覚え、さらになぜ感覚だけを覚えるかに対しても、深く分析できないのである。

家族を失った省三郎は「どのみち人はいつかひとりぼっちになってしまう」(229)としか思わず、妻の死後も「息子と同じようにひとりでやっていくことに慣れてしまった」(232)。ここから分かるように、内面的な問題に遭遇しても、それを解決できない省三郎は孤独な人生を送っているのである。

### 3. 2 トニーの遭遇した問題

トニーの問題はのちに彼の妻になったある女性の出現に由来する。小説では、その女性に出会った時のことを次のように描いた。

彼女には何かしら彼の心を激しく打つものがあった。彼は一目見たときから胸が詰まってしまう息ができないうらだった。彼女の中の何がそれほど強く彼の心を打ったのか、彼にもよくわからなかった。もしわかったとしても、それは言葉で説明できる種類のものではなかった。

それから彼は娘の着こなしに注意を引かれた。(中略) 彼はこれまでそんなに楽しげに服を着ている女を見たことがなかった。服の方も彼女の身にまわれることによって、新たな生命を獲得したかのように見えた。(235)

山根由美恵氏はトニーに出会った時の彼女を次のように分析している。「この段階では彼女の深層（人間性）と表層（服）とは良好な関係にあった」（山根由美恵 2010：21）。深層と表層の対比で彼女を捉えるのは極めて有効だと思われる。ただ、山根氏の言った深層は「人間性」（山根由美恵 2010：21）に言い換えられるかについては再検討する必要があるだろう。前述に従えば、深層は内的世界に属するもの、言い換えれば心のことを指している。そして、上記引用においては、三人称で彼女への認知を表しているが、その認知は明らかにトニーの視線があり、その視線は内的世界から外側の服へ移動しているのである。したがって、トニーを惹きつけたのは服ではなく、彼女の心の何ものかと言ったほうが適当であろう。ただ、トニーは心の何ものかが服に新たな生命を与えたと考えたので、服のことを内的世界の外的表現だとみなしているのである。この点から見れば、彼女のことを強く求めるトニーは、その時、実は内的世界を強烈に探求しがっていると言っていいだろう。

深層に属する内的世界を求めるトニーは、結婚後、服を買いすぎる妻の買い物を止めたが、これによって妻の事故死を導いた。妻に死なれたトニーにとって、いかなる

方法で内的世界を求めるかが問題となった。彼は「もっとも妻の体型に近い女性」(242) をアシスタントとして雇用し、働く間に妻の服を着させる方法を採用したが、結局残された服が単なる入れ物で、内的世界とは次元が違うことを悟った。そこで、トニーは「古着屋を呼んで、妻の残していった服を全部引き取らせた」(246) が、空っぽになった部屋はその後、父親のレコードで積み上げられた。しかし、トニーは「空気を入れ換える」(247) 以外、その部屋に足を踏み入れなかった。結局父親のレコードも処分され、何もかも失ったトニーは「今度こそ本当にひとりぼっちになった」(248) 。

父親と妻はいずれもトニーにとって重要な存在である。勿論、ここで言う重要な存在とは、別に二人ともトニーの身内なので重要なのだという意味ではない。歴史の刻みを帯びた名前を付けられており、その名前に多大な影響をもたらされたため、<トニー> という名前に賛成した父親の省三郎はおそらくトニーの<過去>を意味しているだろう。それに対して、絶え間なく服を買うことを通じて自分の存在を示す妻の行為はバブル期前後の日本と合致し、トニーにとって<現在>を象徴していると言える。<過去>と<現在>に対して、トニーはいかに認識するのだろうか。確かに彼はレコードと服のような外的方法に頼りたがっていたが、結局全て失敗してしまい、<過去>も<現在>も有効に認識できなかった。「ひとりぼっち」(248) の結果はトニーの孤独状態を表現していると同時に、認識の失敗も暗示していると思われる。

以上の分析からわかるように、実用主義は確かに物質的な問題を解決できるが、<過去>と<現在>に対しては有効に認識できず、そのため内的世界に属する問題となると処理できなくなるのである。滝谷父子は同様に寂しい生活を送ることになったが、これはまさに内的世界の問題を解決できないから現れた現象であろう。それでは、実用主義の態度を持つ滝谷父子はなぜ寂しい生活を送ることしかできないのだろうか。

#### 4. 記憶を持たない滝谷父子

第二節と第三節ではそれぞれ歴史と滝谷父子、実用主義と滝谷父子の関係を考察、分析した。以上の考察と分析から分かるように、滝谷父子はともに歴史に対する意識を持たない人間で、同様に実用主義の態度で問題に対応する。勿論、実用主義の態度では全ての問題を解決できず、滝谷父子にとっては、内的世界に属する問題がどうしても扱えないものとなる。こうした滝谷父子は結局内的世界の問題を解決できず、寂しい人生を送ることしかできないわけである。だが、歴史に対する意識を持たないことと滝谷父子の実用主義の態度、さらに実用主義の態度と寂しい人生の間にいかなる関係があるのだろうか。

小説においては、父親の省三郎は歴史に対する意識を持たない人間と描かれているが、実は歴史に対する意識を持たないことは、記憶を持っていないということを意味しているのではないだろうか。

金瑛氏は「集合的記憶概念の再考」において、記憶の概念を次のように論じている。

リクルールの議論を敷衍すれば、記憶とは過去を想起する主体の人格が、過去から未来に向かって連続していることを示す概念である。ここでいう主体は、個人的記憶の場合には「私」、集合的な記憶の場合には「われわれ」として現れる。銘記・保持・想起という一連の作用は、この連続性を前提としてはじめて意味をもつのである。（金瑛 2012：5）

上記の記憶の概念は極めて重要である。なぜなら、記憶の前提として過去を想起する主体の人格があり、その人格が過去から未来へ向かう連続性を有していることが記憶の不可欠な条件であることを提示したからである。これをもって、省三郎のことを考察すれば、彼は主体の人格が欠けており、記憶の形成ができない人間だとい

うことがわかる。小説に描かれた歴史は彼が経験した時代の出来事にも関わらず、彼と無関係なところで行われているようである。それだけでなく、彼自身も自ら経験したことを生かして自分の人生を考えることもできないようである。これは省三郎自身の危うい体験と家族の死からすでに証明できたが、最も典型的な例は息子のトニーの命名と書いていだろう。つまり、過去から未来に向かう連続性がないため、「戦乱激動の時代」（227）の経験は省三郎の教訓になれず、米軍の少佐にアメリカ風の名前を息子につけてもらったわけである。これを敷衍すれば、記憶を持たなければ、過去を現在に結びつけられず、結局現時点しか考えられない判断となり、実用主義の態度で人生の出来事に対応する者にならざるを得ないのである。

以上は歴史に対する意識と実用主義の関係を究明したが、また、安川晴基氏によれば、個人の記憶は「自分の過去の出来事を時間と空間において位置付け、物語の構造を与え、意味を付与し、想起することである」（安川晴基 2008：296）。「個人の想起の行為が常に「社会的枠組み」（*cadres sociaux*）によって条件づけられているというもの」（安川晴基 2008：296）で、この「社会的枠組み」とは、「第一に、個人を取り巻く環境、つまり個人が属している集団のことである。この概念はさらに敷衍されて、集団の成員が分かち合っている共通の知識を表している」（安川晴基 2008：296）のである。安川晴基氏が論じたのは記憶の形成メカニズムおよび個人と集団との関係である。これをもってさらに省三郎を考察すれば、以下のことがわかるだろう。主体の人格が欠けており、過去から未来に向かう連続性がないため、省三郎はおそらく「自分の過去の出来事を時間と空間において位置付け、物語の構造を与え、意味を付与し、想起すること」（安川晴基 2008：296）ができない。このような省三郎は、彼が属している集団と分かち合えるものがなく、集団の一員でありながら、集団から脱落している。これが、省三郎が孤独な人生を送る根本的な原因と書いていだろう。

また、省三郎は記憶の形成ができないため、自分の経験を意味付けられず、息子のトニーを含めた他人への伝達（語る行為）も不可能である。したがって、息子



のトニーに向かっても「進んで心を開こうとはしなかった」(232)。ただ、この「進んで心を開こうとはしなかった」(232)の前に「どちらからも」(232)という主語に当たる部分があるので、「進んで心を開こうとはしなかった」(232)のは滝谷父子の類似性を表現していると言っていい。

息子のトニーといえば、幼い頃から孤独な少年のイメージが強かったため、父親に対しても「進んで心を開こうとはしなかった」(232)が、これは単に表の現象に過ぎない。実際には自分の人生を歴史と結び付けないトニーも父親の省三郎と同様、歴史に対する意識を持たない人と言っていいだろう。したがって、彼も記憶の形成ができず、父親と周りの人などとはうまく交流できない状態にある。そのため、当然孤独な人生を送り、過去と現在を理性的に考えられない実用主義者になるわけである。

## 5. 結論

ここまで、歴史に対する意識がないことと実用主義との関係、そして実用主義者はなぜ寂しい人生を送るかという二つの問題を解決してきた。歴史に対する意識をもたない人は過去から未来へ向かう連続性を考えられず、記憶の形成もできない人である。一方、実用主義者も同様に過去から未来へ向かう連続性を考えられない人間である。したがって、歴史に対する意識をもたない人は自分の人生に直面する時、実用主義の態度しかとれないわけである。また、過去から未来へ向かう連続性を考えられない実用主義者は記憶を持たない人でもある。記憶を持たない人は寂しい人生を送らざるを得ないために、実用主義者も同様に人生の寂しさを味わうわけである。

本稿は考察、分析を通じて、以上のような結論にたどり着いたが、ここでもう一つ重要な問題が新たに出てくる。つまり、滝谷父子の人生は類似性があるため、小説

は、もし以上のような結論だけを表現しようとするなら、滝谷父子のうちどちらか一人の人生を描けば十分である。小説はなぜ滝谷父子二人の人生を描いたのだろうか。

滝谷父子は同様の問題を抱えているが、二人の対応には根本的な差異が見られる。言い換えれば、彼らは類似性を見せたものの、小説においては、異なった役割を果たしているのである。父親の省三郎は思考をやめたのに対して、息子のトニーは問題解決の方法を求め続けていた。勿論、トニーも結局失敗を迎え、「一人ぼっちになった」（248）が、打開策を求める彼の努力は看過できない。実際にはトニーの問題は一見トニー自身と多大な関係があるようだが、根本的な原因はむしろ父親の省三郎にあると言えよう。つまり、省三郎は本来記憶を形成し、それを語る行為によって息子のトニーに伝えるべきだったが、記憶の形成も語る行為もできなかったのである。さらに、滝谷父子にとって、記憶の場として存在すべき＜家＞も、省三郎の演奏旅行などで、その役割を喪失していたと言っていだろう。したがって、トニーの問題は父親の省三郎に根本的な原因があるに違いない。もし省三郎が「歴史に対する意志とか省察とか」（227）を持ち合わせた人間だったら、おそらくトニーは今のような状態ではなく、順調に打開策が見つかるだろう。

そしてもう一点重要なのは、トニーが問題にぶつかった時期は日本のバブル期前後だったので、彼が直面した問題はまさに当時の日本がぶつかった問題だとも言えよう。つまり、戦後の日本は米軍占領のもとで、実用的な科学技術に頼って経済を発展させ、驚くべき姿を世界に見せたが、実用性に重点を置いたため、内的支えが欠けていたのはむしろ必然なことと言っていだろう。当時の日本はまさに描かれたトニーのように、内的世界の問題を解決しようとしても解決策が見つからなかったのである。この点から言えば、「トニー滝谷」はバブル期前後の日本が抱えた問題の根本を指摘した作品と言えよう。

「トニー滝谷」は記憶を持たず、実用主義で現実に対応せざるを得ない滝谷父子のことを描いたが、記憶の形成ができず、記憶の伝承もできない滝谷父子の造形は

まさに日本の象徴と言っていいだろう。今までの日本は実用主義の態度をとり、数多くの難関を乗り越え、豊かな国にもなった。だが、豊かな表面の下で、日本という国は主体性がなく、いかに内面的な問題に対応し、現在と未来に向かうかが依然として大きな問題となっている。「トニー滝谷」はこれらの問題を指摘しただけにとどまらず、記憶を形成させることこそ問題解決の有効な方法だ、というメッセージを強く発信しているのである。勿論、ここにおける記憶は主体の人格を有する個人に基づいて作られた集合的記憶のことである。このような記憶が一旦形成されたら、集団に属する人々がいかに現実と未来に向かうかも指導できるだろう。

僕の言う「歴史」は、たんなる過去の事実の羅列でも引用でもなく、一種の集合的記憶としての歴史です。例えば、ノモンハンでの間宮中尉の強烈な経験も、ただの老人の思い出話ではなく、僕の中にも引き継がれている生の記憶であり、僕の血肉となっているものであり、現在に直接の作用を及ぼしているものです。（村上春樹 2010：26）

これは村上春樹がインタビューを受けたときの『ねじまき鳥クロニクル』をめぐる発言である。長編小説『ねじまき鳥クロニクル』を読めばわかるように、間宮中尉のノモンハンでの経験を聞いたおかげで、「僕」は妻の久美子を奪回する方法に気づいた。記憶の形成をキーポイントにして読めば、短編の「トニー滝谷」と長編の『ねじまき鳥クロニクル』は違う方向で試みた対の作品と言えよう。

\* テキストは『村上春樹全作品 1979-1989⑧』（講談社、1991 年）による。

**参考文献（五十音順）**

- イアン・ブルマ（1998），『日本探訪 村上春樹からヒロシマまで』（石井信平訳），東京：TBS プリタニカ。
- 宇佐美毅、千田洋幸編（2012），『村上春樹と一九九〇年代』，東京：おうふう。
- 金瑛（2012），「集合的記憶概念の再考：アルヴァックスの再評価をめぐる」，『フォーラム現代社会学』11 号，p 3－14。
- ジェイ・ルービン（2006），『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』，畔柳和代訳，東京：新潮社。
- 徐忍宇（2007），「名前からの逃避：「固有名」のアレゴリーとして読む「トニー滝谷」」，『九大日文』10 号，p52－64。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会(2001),『日本国語大辞典 第6巻』（第二版），東京：小学館。
- 藤井省三（2007），『村上春樹の中の中国』，東京：朝日新聞社。
- 森晴彦（2019），「『トニー滝谷』の本文改訂(6)ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(1)」，『表現学』5 号，p19－26。
- 森晴彦（2020），「『トニー滝谷』の本文改訂(7)ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(2)」，『表現学』6 号，p11－17。
- 森晴彦（2021），「『トニー滝谷』の本文改訂(8)ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(3)」，『表現学』7 号，p1－10。
- 村上春樹（2010），「ロングインタビュー」，『考える人』夏号，p13－101。
- 安川晴基（2008），「「記憶」と「歴史」：集合的記憶における一つのトポス」，『藝文研究』6 号，p282（85）－299（68）。
- 山崎真紀子（2019），「村上春樹が描く上海――『トニー滝谷』における父子の傷」，高網博文など編『上海の戦後：人々の模索・越境・記憶』，東京：勉強出版。
- 山根由美恵（2010），「絶対的孤独の物語―村上春樹「トニー滝谷」「氷男」におけるジェンダー意識」，『国文学攷』205 号，p19－33。

本論文於 2021年11月7日到稿・2021年12月10日通過審査。

## 《淡江外語論叢》徵稿辦法

108 年 6 月修訂

### 一、稿源性質：

- (一)《淡江外語論叢》為學術性期刊，內容包括外國語文教學及研究：外國文學、比較文學、外國語文、語言學、比較語言學、外國文化、翻譯學、華語教學、外國文學及語言之教材教學法及作為第二外語的華語教學等領域。
- (二) 刊載文章須為首次發表之著作，且為上述範圍內的原創學術論文。
- (三) 本刊不接受曾以其他語言發表，或翻譯成其他語言且內容雷同之論文著作。

### 二、徵稿對象：本院專兼任教師、研究生及國內外專家學者。

### 三、篇幅與語言：來稿除英、法、德、西、日、俄文等 6 種外語外，亦可使用繁體中文，且以不超過 2 萬字為原則。

### 四、內容與格式：

- (一)論文需符合科技部「國內學術性期刊評量參考標準」。
- (二)所有來稿務請完全依照「《淡江外語論叢》論文書寫格式」處理妥當，否則礙難接受。

### 六、評審：著作經本刊編輯委員會初審後，委請校內外專家採匿名方式審查。審稿辦法由本刊編輯委員會另定之。

### 七、文責：本刊刊載之著作，文責由作者自負。論文經送審查後，不得要求撤回。

### 八、版權：投稿本刊時須檢附著作權授權書，著作文稿經本刊決定刊用後，其著作權仍歸著作者所有。本刊具「第 1 次使用權」。歡迎著作者(或其授權人)日後以任何形式引用或轉載，不須徵求本刊同意，但務請註明「原載《淡江外語論叢》第○期○頁民國○年○月」字樣。

### 九、酬勞：本刊為純學術服務性質，無法致送稿酬，所獲得之權利金

歸淡江大學外語學院所有。每位作者贈送兩冊。

十、本辦法經本刊編輯委員會通過後實施，修正時亦同。

本刊賜稿處及聯絡方式：

25137 新北市淡水區英專路 151 號 淡江大學外語學院 淡江外語論叢

Phone:(02)2621-5656 x 2558 (02)2622-4593

Fax:(02)2623-2924

E-mail : jtsfee@gmail.com

## 《淡江外語論叢》書寫格式

103年10月修訂

本刊為統一格式，敬請配合版面格式，以利作業。相關事項如下：

一、所有來稿請以電子檔傳送至本刊[jtsfee@staff.tku.edu.tw](mailto:jtsfee@staff.tku.edu.tw)信箱。

二、無論中外文稿件，一律由左向右橫寫，A4規格。版面上下各空2.54cm；左右各空3.17cm，以12號字體隔行繕打。最小行高；18PT。中文、日文每行34個字，每頁38行，西文每行69字元，每頁38行。

三、論文採「隨文注」；補充說明之注則採「隨頁注」；引述出處標寫如（張大春 2000:27）、（Catfort 1968:35-38）；引言後置如下：

一國文字和另一國文字之間必然有距離，譯者的理解和文風跟原作品的內容和形式之間也不會沒有距離，而且譯者的體會和他自己的表達能力之間還時常有距離。〔...〕因此，譯文總有失真和走樣的地方，在意義或口吻上違背或不盡貼合原文。那就是『訛』（錢鍾書1990：84）

四、「中、英文摘要」及「中、英文關鍵詞」請附於論文首頁，「中、英文摘要」字數以一頁A4為宜。

五、論文後面僅列出「引用書目」即可。書目呈現方式如下：

金 緹（1989），《等效翻譯探索》，北京：中國對外翻譯出版公司，167頁。

吳錫德，〈如果新小說變成經典〉，《中國時報》，1997/10/30，頁42。

Cotford, J. C. (1965), *A Linguistic Theory of Translation*, London: Oxford Univ.Press,

Chevreil, Y. (1989), *La littérature comparée*, (比較文學), Paris: PUF, 中譯本：馮玉貞譯，台北：遠流。

六、中文正文採用「新細明體」，引文採用「標楷體」。

西文正文及引文採用「Times New Roman」；日文採明朝體。

七、請提供論文作者英文姓名及文章篇名英譯。

#### 八、校正

所有文稿均請作者自行校正，務請細心謹慎。

若審查人表示文稿須修正後刊出，本刊將先退回稿件，請作者於2週內修正後送回，逾期則不予刊登。

#### 九、各語言書寫格式可參閱前期刊登文章。

(淡江大學外語學院網址：<http://www.tf.tku.edu.tw>)



## 《淡江外語論叢》審稿辦法

110 年 12 月修訂

一、所有來稿先由本刊編輯委員會就論文寫作格式、稿件的書寫及排版是否符合本刊規定進行形式審查。不合格者退回請修正。

二、經形式審查合格者，送交審查人初審。

三、審查人名單由編輯委員會提名校內外專家學者產生，審查人之姓名皆不公開。內稿送 2 位校外審查人初審；外稿以送 1 位校內審查人及 1 位校外審查人為原則。刊登標準如下：

審查意見	結 果
2 位通過	直接接受或修正後再接受
1 位通過，1 位不通過	送第 3 位審查人複審
2 位不通過	退稿

四、評審費：每篇論文每位評審費用 1,000 元，共 2,000 元由投稿人自行負擔，於投稿時以郵局現金袋掛號寄至本刊，送第三人審查者仍由作者自行負擔 1,000 元。

五、本辦法經本刊編輯委員會會議通過後實施，修正時亦同。